

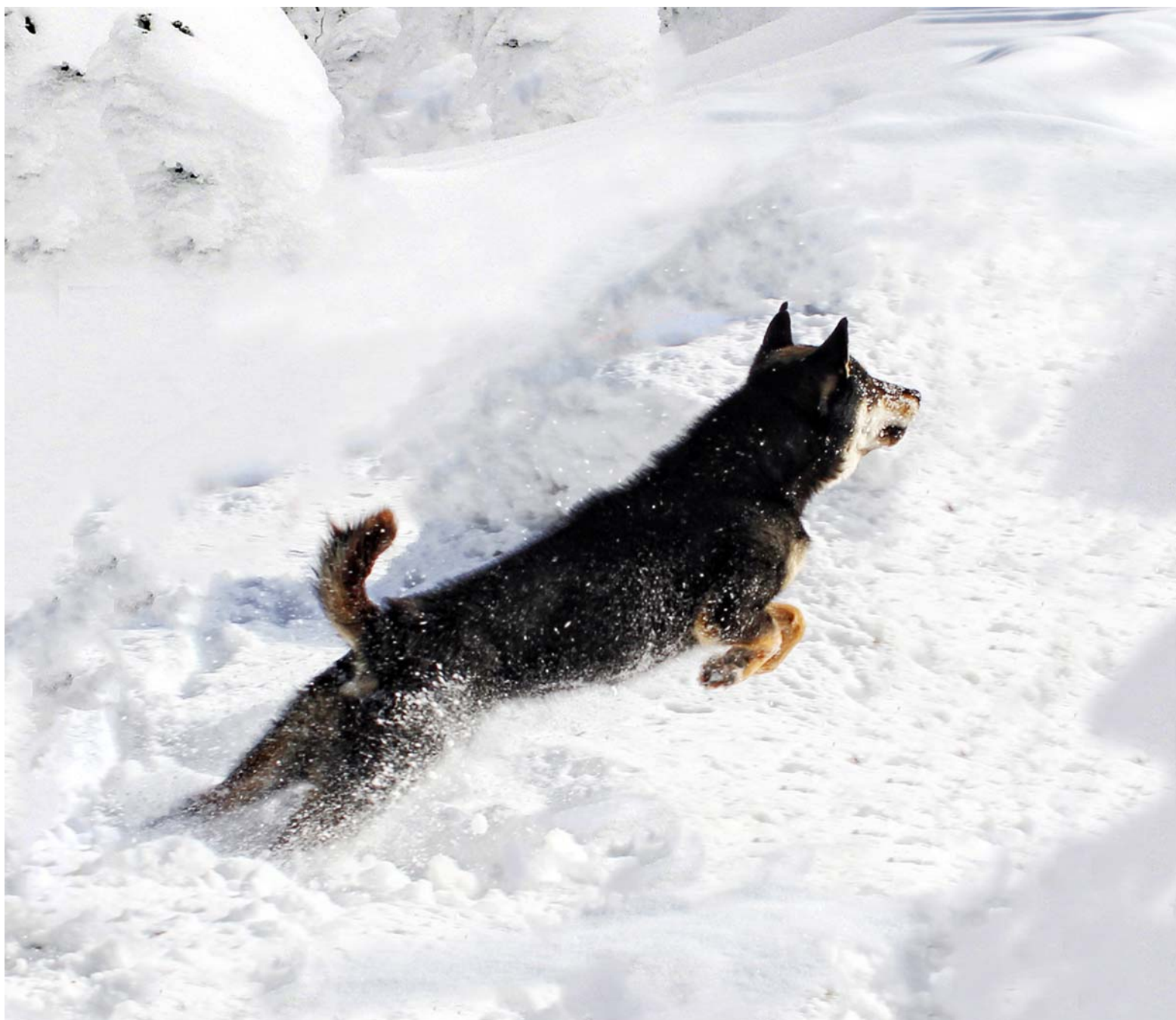
NPO 法人



2011年12月10日

第12号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

NPO法人



Jomon Shiba

第12号

もくじ

潔い犬と醜悪な人間とその社会

☆JSRC理事長 新美治一(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員) 2

縄文柴犬は誰のものか? ☆JSRC 副理事長 五味靖嘉 ☆石川県 黒梅 明 ☆群馬県 栗原明美 4

シバの散歩道(12) ☆JSRC理事・根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)6

お便りコーナー ☆北海道・橘さん 10

☆岩手県・菅野さん ☆群馬県・小山さん ☆宮城県・田中さん 11

田中さんの質問に答えて ☆五味靖嘉12

☆長野県・肥田さん ☆富山県・竹内さん 13

☆和歌山県・和田さん 14

☆石川県・黒梅さん 16

☆秋田県・黒澤さん ☆福島県・一ノ澤さん 17

☆宮城県・阿部さん 18

根深誠・藤井忠志対談講演会「白神山地が世界遺産に指定されるまで」-4 ☆本州産クマゲラ研究会編 20

事務所報告 ☆新入会 ☆会費 ☆御寄付 ☆仔犬登録 ☆寄贈 ☆お断り 24

☆諸料金一覧 ☆血統登録について 3



1967~1970年頃
足尾銅山(部分)
(水彩)五味画

会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

潔い犬と醜悪な人間とその社会

NPO法人 縄文柴犬研究センター 理事長 新美 治一

(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員)

人は、人と交流して初めて人間になる。人との交流を一切断ち切った人は、人間ではなく「仙人」か「生き仏」になるほかない。その上で、仙人にしても生き仏にしても、他人が存在することによって、初めて「価値」を得るのである。生きていくうえで、もっとも難解な方程式は、人間関係である。この関係のなかでのみ人は、人間になることができる。そのとき、権力・名誉とカネに屈すれば、「醜悪な人間」になるし、人の価値を尊重することを基準にすれば、「本来の人間」になることができる。

犬はどうか？犬が犬としての本来の特性を活かすことができるのは、群れのなかで生活するときであろう。現在のように、人間の都合によって、ばらばらにされ、鎖に繋留されるか、ケージのなかに閉じ込められるか、良くて柵で囲まれて「放し飼い」にされている程度である。犬が何を考えているか掴みきれないが、それでも、犬は人間の介助によって健気に生きている。小生の経験で、犬は紐を解いてもらえれば、嬉々として飛び跳ねる。餌と散歩とほんの僅かな自由があれば、満足しているのかも知れない。犬は、他の犬に会えば、自分を確かめる。威嚇をしたり、へりくだったり、まったく無視したりする。しかし、喧嘩をして決着をつけなければならないときもあり、犬社会も、このときは大変だな、と思う。それでも、喧嘩をして、一方が降参して勝敗が決まれば、負けたほうは、「尻尾を巻き」敗走態勢に入り、勝った犬は、負けた犬にそれ以上のことを要求しない。人間のように、負けた者を再起不能になるまでとことん叩きのめすことはない。

原発事故以降、人間社会の醜悪な部分が「これでもか？」・「これでもか！」というほど際限なく、次から次へと暴露されている。原発利益共同体（別名多数あり。例えば、原子力ムラ）で経済的利益(カネ)をむさぼるために、どれだけの人々が醜悪な人間関係をつくりあげたことか。権力と名誉を得るために、人間の「魂」を投売りしたことか。これだけなら、まだ、その人の「生き方」の問題だと放念することもできる。しかし、彼らが「原発利益共同体」でやらかしたことは、国を滅ぼしかねないし、「人々を愚弄しつつ現に生き続けている。これは、認めることはできないし、許せない。

認めることも許すこともできない無数の事項のうち

の1つに「やらせ」がある。10月15日の新聞報道によれば、九州電力役員会は、<「やらせ」調査第三者委員会>の「見解」を無視し、佐賀県知事の「やらせ」行為は無かったと結論づけ、加えて、「やらせ」が発覚したときの記者会見で陳謝し、社長を含め関係者の適当な処分を行うと約束したことを反古にしたのである。

「やらせ」は、詐欺ともいえるべき行為である。民主主義のもっとも初歩的なルール違反である。原発に対する国民の意思を無視する行為である。国民を愚弄する行為である。

地元の意向は、通商産業省原子力安全・保安院が、実際に「原発の新規建設」・「原発の再稼動」を「許可」する際の決定的要件である。国、地方公共団体（自治体）、電力会社などが、政府の指導のもとに、市民の意見を聴取する会を組織し、その会場での「地元の意向」の結果に基づいて、「許可・不許可」の最終的判断をする、というのが確立された手続である。ところが、「やらせ」は、「原発の新規建設」・「再稼動」が主催者の既定の方針として確定されているにもかかわらず、「原発について市民の意見を聴取する会」を開催し、「やらせ」で発表されるものがあたかも住民の意向であり、これを尊重するかのポーズをとる。これは、「詐欺」行為である。これは、「市民の意見を集約する際」に彼等にとって万一の不測事態が生じないように、「原発」賛成の「市民の声」をでっち上げるための行為である。しかも、開催関係諸機関がこの「やらせ」を組織するのである。

民主主義の根幹をなすのは、憲法第21条でも保障されている「表現の自由」である。何時・いかなる問題についても、誰でも発言することができる権利であり、これを制限することは事実上できない。為政者は、こ



1999.02.04写

の原則に基づいて、特定の問題での「意見の動向」を聴取し、多数の意見に依拠しこれを処理することが民主主義の「大前提」である。「やらせ」は、為政者が原発問題での「多数派」を積極的につくりあげる行為である。「やらせ」は、民主主義を根幹から崩す行為だと断罪するのは、まさに、この点にある。

まじめに、会場に行き、自分の意見を「聴いてもらえるもの」と信じて発言の機会を大切に市民の「口惜しさ」は、いかばかりであろう。世の中には、この程度のことはいくらでもありますよ！と言ってしまうと、所管する機関の<ペテンもペテン>を認めてしまうことになる。

そして、もっとも大変なことは、「やらせ」を知りながら、<地元住民の方々の原発に対するご理解と好意的な意向に基づいて>原発の建設や再稼動を認めてきた原子力安全・保安院の「卑劣なやり方」である。私は、地元の人々が「札束攻勢」に負けて、「原発を理解した部分」を否定する積りは無い。政府からおいてくる「地元には不相応な多額の交付金」や電力会社の地元への「協力金」がいつのまにか「麻薬」になり、身動きのできない状況に追い込まれていった原発立地地域の人々の「原発に好意的な理解」を知らない訳ではない。そうした事情を知り尽くしていても、それでもなお、詐欺行為をやり、民主主義のルールを破り、市民の意向を愚弄してつくりあげた「地元の意向」を

「たて」にして、原発行政を進めてきた政府と東電は、醜悪である。カネと権力・名誉に屈服したとき、人間はどのように醜悪になるかの典型である。そして、もっと大変なことは、これらが、人間社会を動かしている大きな要因であり、日々誰でもそこに身を置かざるを得ない、ということである。人間関係は、本当に難しい。

私の「林王丸（通称、リン）」は、私との関係さえ良好であれば、それ以上何も望まない。老齢であるために、他の犬と張り合うこともないし、時たま、散歩で名前も知らない「チビ犬」が吠え立てても、無視。河原に出て、ひもを解いてやっても、2～3メートル以上、離れることもない。誠に平和である。むかし、「私は貝になりたい」という映画があったが、いまは「犬になりたい」と思うことがないわけではない。人間社会は、誠に大変だ。しかし、この大変さに正面から、毅然と立向かわないと、際限のない泥沼に引き込まれることは必定である。踏ん張り、仁王立ちして、立向かわざるを得ない。リンからみれば、頼もしい主人なのか、俺のご主人さまは「年寄りの冷や水」というのを知らないのかな？とニヤニヤしているかもしれない。いやいや、単純明解な「潔い犬の世界」からでは、複雑怪奇な人間社会を理解するのは到底不可能であろう。
(2011. 10. 16)

2012年 総会・理事会のご案内

JSRC 理事長 新美 治一

日時=2012年4月15日 午前9:30～午後4:00迄
場所=仙台市泉区虹が丘コミュニティーセンター
備考=前日の宿泊希望者は、早めにお知らせください。

(有志による交流会など、検討したいと思います。)
次回、13号の会誌にて、詳しい総会案内をお知らせします。

血統登録について

- ①. 仔犬が生まれた方は御一報下さい。(用紙送付)
- ②. 申し込みには登録料が必要です。
- ③. 血統登録、犬舎名登録は五文字以内で、漢字には必ずふりがなを付けること。
- ④. 両親犬のカラー写真(5×6cm以上)を添付。
- ⑤. 二週間以内に、カラー印刷で発行しております。

諸料金一覧

会費	・ 入会金	1,000円
	・ 年会費	5,000円
登録料	・ 血統書発行 一頭	1,500円
	・ 犬舎名	2,000円
	・ 登録再発行 一頭	1,000円
	・ 単独犬	2,000円

特集!

縄文柴犬は誰の物か？

投稿歓迎

以前から質問のありましたテーマを、この度、ML上で投稿を募集した特集コーナーです。

JSRC 副理事長 五味靖嘉

縄文時代のイヌの研究については、考古学・形態学・生化学・人類学などの分野に於いて、近年、その関連がますます深まりを見せ、わが国の「在来種」としての「縄文柴犬」と名乗るだけの経過や背景が存在したことが認められて参りました。

この縄文柴犬はわが国の在来種として、今から1万年前の縄文時代に居たイヌと相似しているということが、歴史的・文化的遺産であるという事だけでなく、世界的に見ても特異な事例であり、本来ならば、国家的事業としての、保存・研究が為されるべき性質の問題ではないかと考えます。

しかし、残念ながら全体としての現状を見渡すと、とてもそこまでの理解には至っておりません。従って、当面は一人でも多くの方々との協力のもとに、「縄文時代のイヌの研究」と縄文柴犬への理解を深め、様々な場面で犬との暮らしを楽しみながら、保存活動に参加していただく事が何よりも大事なことになるのではないのでしょうか。

在来「種」としての縄文柴犬(ここでは、個体を意味しない。)は、誰か特定のグループや個人の「私的財産」ではありません。過去を振り返って見ると、「犬は誰彼のものか？」という様な趣旨の排他的(排除)な考え方が随所に見受けられましたが、これは歴史的な研究成果を冒瀆するものであり、このようなお互いの軋轢を生み出すような考え方を持ち込んではいけません。(2011. 10. 01)

石川県 黒梅 明

「人は、人と交流して初めて人間になる。」「生きていくうえで、もっとも難解な方程式は、人間関係である。この関係のなかでのみ人は、人間になることができる。」

私はこの文にいたく心を動かされました。私は今、高齢者介護を通じて生きることを援助する仕事をしております。どんな人であっても、その人生には意味があり、苦難を乗り越えてきたというかけがえのない価値があると思います。富も貧も、賢も鈍も、有名も無名も問わず、何人の人生にも、その人を取り囲んできた人間関係が存在し、その関係の中で磨かれ、乗り越えてきた力を感じます。そこにその人の個性、一人ひとりの命の尊厳、人間が生きるという価値の大きさを感じます。

人は社会的動物であり、一人では生きられません。しかし、自然界の生き物として闘争本能を生まれながらに持っており、加えて自己中心的な発想を持っている人間は、社会を構成してしか生きられないにもかかわらず、

その社会(人間関係)の中で必要以上に独占し、そのために欺き、その執拗な闘争は感情を高ぶらせ、妬み、憎しみを生み出しています。人間社会には矛盾が渦巻き、思考し感情を持った人間は自然の制約だけでなく、人間関係にも束縛され、豊かな生産力を確保できても苦難に曝されています。醜い人間関係は社会にはつき物です。新美様のご指摘のように、今回の原発事故に絡む事態は、嫌と言うほど醜さがぷんぷんし、権力政治家と大企業の利益中心主義、自己本位な姿勢を露呈しています。

「生きていくうえで、もっとも難解な方程式は、人間関係である」は、介護を通じて高齢者の生活援助をしている私にはよくわかります。しかし、その難解な方程式の完全な解は得られていませんが、「この関係のなかでのみ人は、人間になることができる」のであり、この関係にあるものが何かを掴みながら生きれば、個々の人生も人間社会の未来も明るいのではないかと思います。精神を疲弊させ、数多くの自殺者まで生み出す人間社会でありながら、長い歴史を連ねてきたその中に、人類の発展の可能性が込められていると私は考えます。

それは、きざに聞こえるかもしれませんが、人を愛し、謙虚にありのままに彼我を受け止め、ともに関係しあって共生しようとする人間の性質です。自分以外のものをいとおしみ、援助しようとする心情や行動は、いつの時代にも失われていません。それは名もない大多数の庶民の生き方として苦難に耐え、連綿と続いています。その力が今日までの人類社会の発展を築いているんだと思います。

人が愛するとき、例えば家族、恋人、友人、知人、師弟、地域の仲間、同志等々に見返りをなんら求めない援助を差し伸べようとするとき、人は自己中心的ではなく謙虚になりきっています。その人間関係は何ものにも代えがたく、潔いものです。私はそれを能登半島地震や中国四川大地震の調査救援活動を通じて体験しました。もちろん、今春の東北関東大地震においてもいたく感じた点です。被災から立ち上がろうとする人間社会の中に、人間は信じるに値する、人間関係は美しく潔いものを十分に持っていることを目にし、私は確信しました。

ところで、縄文柴を飼いだしたばかりの私には、縄文柴は人類の社会文化遺産である気がします。特に日本民族の文化遺産として引き継ぐべきもので、誰のものでもなく、社会的に育て引き継ぐべきものである気がします。

イヌは野生からいつしか人間に飼われ、人間とともに生きる習性を身につけてきました。人間無しには生きられない動物になり、人と共生して人間社会を豊かにする役割を果たしてきました。生後四ヶ月目の縄文柴を飼出した私には、田を駆けぬけ、土を掘り、カエルやコオロギを追いかけて跳び回るこの犬種を見ていると、狩猟や農耕に精を出し、田畑を切り拓いていった日本民族の

歴史を思い起こさせます。

犬は人間の言葉を発しないので本当のことはわかりませんが、時代とともに変わる人間の個性と社会を見ながら、このいつも変わらぬ自己中心的な過度な競争、権力闘争と積み木崩しのような社会構成に驚いているに違いありません。それでも犬たちは、主人とその家族の謙虚で目的を持った生き方に寄り添い、この人間社会とともに生きることを使命としているのであろう。だから、私には、縄文柴は誰のものかと問われれば、人間と共生してきた証であり、人類の社会文化遺産として社会的に共有すべきものだと思うのですが。

確かに、犬は潔い、それは共生する人間と共の潔さであり、共生する人間が醜ければ犬も醜さを漂わす哀しい動物で終わるに違いない、と私は思います。私はいただいた縄文柴犬=キューを潔い動物として育て、そのためにも私自身が潔い人間であろうと努力を続けたいと考えております。(2011. 10. 18)

リュウとの2年10カ月で思うこと

群馬県 桑原明美

丁度一年前の同日、私は「リュウとの1年10カ月」(会誌8号に掲載)と題した「新米ママの子(犬)育て奮闘記」を書いていました。早いものであれからもう一年、リュウとの生活で特段変わったこともありませんが、あらためて見返すと、リュウを意識しない「当たり前」のものになっていたことに気が付きました。

毎日の出勤中も、空き巣の心配をすることもなくなりました。リュウはいつしか我が家の一員となり、しっかり役を果たしてくれています。

「リュウとの1年10カ月」を読み返すと、必死で子(犬)育てしていたものの、気持はわが子(犬)に伝わらず空回り…そんな頃を懐かしく思い返しました。

やんちゃ盛りのリュウが次女(剣道3段)の大事にしていた小手を食いちぎったことがありました。娘は激怒。悪気のないリュウに当たる訳にはいかず次女は忍耐強くなったとか…。それだけではありません。リュウの表現はいつも激しく、出かける長女に嬉しさのあまり飛びつき、一張羅にドロ模様を描く等、思い出せばキリがありません。しばらくの間、子供たちからは冷ややかな目で見られるようになってしまいました。(笑)

こんなやんちゃ坊主も2歳を過ぎるといつしか結構物分りのよい子(犬)になっていたではありませんか。こんなことがありました。いつも利用しているクリーニング店のご主人はとても犬好きで、いつもリュウと歩いて頼みに行っていました。必ず店先で大暴れ。ご主人には「2歳になると大人しくなるよ。」とその度慰められていたのですが、しばらくぶりにクリーニング店に行くと、あの暴れリュウが静かなのです。クリーニング屋さん曰く「ほらね」。偶然かどうか分かりませんがリュウは2歳に

なったところでした。

冷ややかな目で見ていた娘たちからも汚名を返上し、名誉回復したリュウが「エヘン!」と言ったかどうか。やんちゃなリュウは何にでも興味を持ち、縄文柴犬の特質でもある狩猟本能からか、動くものには機敏に反応します。

ボール投げが大好きで、体力を持って余し気味のリュウは走る喜びを全身から漲らせ、魚のようにスイスイと角度を変えながらもスピードを落とすことなく自在に駆け回り、ボールを銜てきます。

「ボール投げ」は一歳半頃からほぼ毎日の日課になっていますが犬飼育歴の浅い私はこうした体験が犬や犬との関係に良いも悪いも解からないまま、どのような影響があるかなどという面倒くさいこともあまり考えず、私の生活サイクルに合わせたリュウとの共生の中で自然発生的にやってきました。「ボール投げ」もわたしの生活サイクルの範囲内でやっています。「仕事を持ちながらよくやるね。」とも言われます。が、私にとって苦でも何でもなく、リュウとの散歩は体力低下の防止に効果的であるし、何よりボール投げは機敏な身のこなしや素早い走り等縄文柴犬の特質を思う存分発揮してくれるので、それを肌で感じる事ができ本当にラッキーなことと思っています。一日の仕事のストレスも全部とはいきませんが半減以上の効果あります。

こんな素晴らしい犬をもっと広く知ってもらいたいと願っているところですが、一部でこの縄文柴犬が〇〇のものなどと私物化しようとしている組織があるとか。その団体は日本古来の在来種であるとも謳っているようですが、「日本古来の」ならばどこかの団体の所有物、私物化は成り立たない図式になります。ただ私のような縄文柴犬を愛する一飼育者はどこの団体の犬であるかどうかなど関係なく、自分の飼っている犬が元気で共に暮らせて、この貴重な縄文柴犬が保存されていって欲しいと願うばかりですが、このような団体の私物化が横行したならば、健全な保存活動の継続に支障が出てくる危険があると危惧されます。

このような心配をすることなく、安心して私達の愛する縄文柴犬を未来へ残せる団体として誇れるJSRCの発展を願っております。(2011. 10. 20)



リュウ=新田の白龍-上州新田荘・2008. 11. 21生(鉄熊×菊の紅子)

シバの散歩道 (12)

犬猫看板観光旅行記 その2

根深 誠 (文筆家・釣り師・元登山家)

あくる日の夕方には、高松在住の友人と落ち合う約束をしていた。私はその約束の時間に合わせて高速バスで高松へ行くことにした。それまでの間、松山で日中、市内観光を愉しんだ。といっても通常の観光と異なり、犬猫看板を見たい、との思いがあった。熊本からここ松山までの間、特別、目を皿のようにして探しまくったわけではないが、行く先々で、看板を見ることはなかった。わが故郷の弘前のように、ベンチ一個が置ける程度の街角の小さな広場から、サクラの観光名所で知られる公園に至るまで、これでもかこれでもかとばかり「犬猫の入園を禁止します」の立看板を至る所に憚ることなく設置している異常性は、おそらく全国的には通用しないのが普通なのである。神経症的な体質を市民に強制する行政、そしてそれに甘んじる市民、このような地域社会はわが国でも類を見ないのではあるまいか。ましてや、飼犬だけでなく係留義務の伴わない猫までも対象にしているのだから乱心の態というほかない。

松山ははじめての町でもあり、一介の観光旅行者が駆け足で素通りするような見物で犬猫看板を確認するのは至難のように思われた。予備知識を詰め込んできたわけでもない。しかし、それでも松山城と道後温泉は知っていたので真っ先に、この二ヶ所に行ってみる

ことにした。

ホテルで、朝食を取るためレストランに行くと、おはようございます、と挨拶の音が明るく弾んでいるので驚いた。接客の訓練が行き届いているのだろう。思わず朝からこちらも気分が快活になる。私も含めてねくら体質のわが故郷とはだいぶ違うようだ。気候風土の影響なのだろうか。

「新聞はマッサージ機のところにあります」

レストランでの朝食時、新聞に目を通すことなど予想もしなかった。自宅でなら朝食前に新聞を見る。こうした心配りもマニュアルに刷り込まれているのだろうかと思いながら新聞を取りに行こうとして、ウェイトレスが運んできた冷たい水を一口飲んで立ち上がると、先に進んで新聞を持ってきて笑顔で、どうぞ、と差し出した。

私としては感心するほかない。気合が入っている。

朝食後、フロントで松山城と道後温泉に行く道順をうかがった。路面電車に乗って行けばいいです。五番乗り場。地下道をくぐってすぐそこです。一日乗車券を買い求めになれば何回でも乗車できます。

私が、その乗車券はどこで買うのか、とたずねると、ここにありますが、と乗車券を取り出した。観光客の私にしてみれば至れり尽くせりである。夕方ちかくまで



①フンの持ち帰りを促す看板。松山、城山公園。弘前とはまったく異なる。

②城山公園の出入口に設置された立看板。公園利用の注意事項が記されている。



荷物を預けたいのだが、コインロッカーはどこにあるのか、との問いには、ホテルで預かってくれるという。メチャクチャ感じがいい。

私は電車を待ちながら、松山というこの町は、町を挙げて観光文化に取り組んでいるとの印象を受けた。受け入れ態勢が整っているのだ。電車から眺める街並も洗練されている。

私はホテルのフロントで教えられたとおり、「大街道」で下車し、大通りを渡って緩やかな上り道の商店街を歩いた。早朝だったので、店の前の路面を箒で掃除している人を見かける。自転車で通学する学生が大勢いた。大通りと異なり、車を見かけないので、そのことを掃除の男性にたずねると一方通行なのだという。「ずいぶんきれいな街ですね」と感想を述べると、そうですか、と微笑んだ。

城山ロープウェイが運転開始するには間があった。カウンターで受付をしているはつらつとした娘さんたちの紋付袴姿に私は目を見張った。どうやら、この町は観光文化に徹しているようだ。

「どうして、紋付袴姿なのですか」

含羞の笑みを浮かべて、

「坊ちゃんのマドンナをイメージしています」

この町の徹底ぶりに、ここでもまた私は驚嘆した。

「大したもんですな。やるなあ」

夏目漱石の『坊ちゃん』を二度目に読んだとき、私は白神山地の保護運動のさなか、心身症を患い、通院

していた。高校生だった一度目のときは愉快地読んだのだが、二度目のときは恐怖小説のようだった。白神山地の保護運動では、思い出すと腹立たしいほどひどい目に遭い、そのため衰弱した私の心に、愉快的箇所が恐ろしさを帯びて迫ってきたのだ。運動は結果的には成功し、白神山地の当該区域は周知のように世界遺産に登録され、現在に至っている。けれども運動を支えた理念、それは私自身の自然観や世界観、人生観と通底していると言っていいものだが、犬猫看板にかかわる問題と同様、本質的な解決がされたわけではなかった。もちろん、いまなおされていない。

この点については、この先、おりおり触れていこうとしよう。

『坊ちゃん』が出たついでに述べれば、松山にかかわる、私が読んだことのある著作がもう一冊ある。司馬遼太郎著『坂の上の雲』。わが国の勃興期ともいふべき明治という若々しい時代をテーマに、松山出身の三人の主人公の生き様を中心に据えて描いた長大なその歴史小説の冒頭部分に次のような一節がある。

たくぼく

子規は、そのあとからつづいた石川啄木のように、その故郷に対し複雑な屈折を持たず、伊予松山の人情や風景ののびやかさをのびやかなままにうたいあげている点、東北と南海道の伊予との風土の違いといえるかもしれない。

たしかに風土、すなわち気候や自然環境と、そこに

③犬を連れて散歩者。多くの人たちに公園が利用されている。



暮らす人には無視できない因果関係がある。風土の違いは文化や、人の気質にまで影響を及ぼすだろう。しかしグローバル化の現代にあっては、風土を超越した理念に基づくコスモポリタンの人格もまた存在する。

私は満開の松山城をぶらつき、歩道を下りて、二之丸史跡庭園に行った。そこからロープウェイの駅舎まで上り返し、リフトで城山を降りた。そして大街道から路面電車で道後温泉に行き、一風呂浴びた。何組かの欧米人男女の観光客も入浴券を買い求めていた。この町の観光の国際性を見る思いがした。

入浴後、ちかくの観光案内所で観光案内図と高松行き的高速バスの時刻表をもらい受け、ちょうど昼食時だったので、駅前にある小さなレストランに入った。店の入口に垂れ下がった「サービスタイム」の札に引かれたのだが、私がサービスランチを食べていると、温泉で見かけた欧米人の中年女性が二人入ってきてコーヒーを飲みながら、ぶ厚いガイドブックを見たり、旅行の日記を書いている。私の耳に入ってくる会話の端々からわかったのだが、どうやら日本がはじめてである。「物価がちょっと高いわね」「食べ物がおいしいね」「そうね」「でもすばらしいところだわ」

私は昼食後、道後公園をちらりと覗いてから子規記念博物館に入った。私が道後公園を覗いたのは、もちろん犬猫看板を見たかったからだが、見かけなかった。それもそうだろうと思う。弘前のように飼犬をつれた歩行者の通行を禁じる、という理不尽がまかり通る地域社会は異常なのである。包み隠さず言えば、弘前で

はその異常が凝り固まって常態化し、不可視な封建性の「檻」を築き上げている。

子規記念博物館では「開館三十周年記念」だった。建物もまた立派である。

正岡子規の作品や生涯にかかわる諸々の催事の中で、子規の恩人でもあり、明治の言論・ジャーナリズム界の巨人陸羯南が紹介されていた。子規は陸羯南の日本新聞社に入社し、生涯にわたって敬愛し世話になっている。

陸羯南はわが故郷の弘前出身である。郊外の、晴れた日であれば津軽平野の向こうに、岩木山が端正な裾野を広げてよく見える丘の松林に顕彰碑が立っている。

名山出名士／此語久相伝／試問巖城下／誰人天下賢

名山名士を出す／此の語久しく相伝う／試みに問う巖城のもと／誰人か天下の賢

名山の見える土地には逸材が育つと古くから伝えられている。それでは岩木山の見える弘前城下からそのような立派な人物が生まれただろうか。現代語訳にすれば、おおむね、こうした意味ではあるまいか。しかし、今、多くの津軽人は冒頭の一句のみ取り出して「名山出名士」と語り、この地方からは名士がたくさん出ている、これからも出るだろうなどと解釈して喧伝している。羯南の真意は詩句の後半にあることは言うまでもない。

④『坊ちゃん』のマドンナをイメージした娘さんが駅前で応対していた。



反骨のジャーナリスト陸羯南の詩碑は、封建的で閉鎖的な故郷と対峙する近代の独立不羈、自由精神の発露とも読み取れる。これは、郷土の後人に贈った叱咤激励のありがたい言葉である。

松山市立子規記念博物館を出て、再び、路面電車に乗り、南堀端で降車し、城山公園を散策した。ここには私が捜し求めている犬猫看板があった。もちろん文言は、弘前市役所が市内の300ヶ所に設置しているものとは異なる。「禁止」という威圧的な表現ではなく、「フンは持ち帰ってね」「リードははなさないでね」「芝生にいけないで」とマナーの遵守を呼びかけるものであり、相手に対する気遣いが感じられる。

この城山公園は松山城の三之丸に相当し、本丸、二之丸とともに国の史跡に指定されている。これと同じように弘前公園も国指定史跡である。弘前市民の中には弘前市役所に迎合し、弘前公園の「犬猫入園禁止」に理解をしめす理由として、この国指定史跡を挙げる人たちがいる。「国指定の史跡なんだから犬猫を入れてはいけない」しかし、これはなんら正当な論拠にはならない。たんなる「虎の威を借りる狐」にすぎないのである。

私が犬猫看板の不当性について問題にする以前、看板が設置されてから四半世紀の間、誰一人として市役所に面と向かって抗議した市民がいなかったのは、弘前という地域社会の後進性や因習、社会風土、体質を

表している。むしろ、抗議した私個人に対して大方の非難の矛先が向けられているのだから本末転倒甚だしい現象ではあるが、地元で生まれ育った私にしてみれば、自分のことのようにそのあたりの事情が理解されるのである。なにしろ私も地元民であり、私の裡にも、津軽の度し難い封建的な毒血が、葛藤しながら流れているのだから。

城山公園を散策後、帰りの路面電車の中で老人同士が会話していた。車内はがら空きで春の爽風が吹き込み、のどかである。おっとりとした口調の、その会話で「なもし」という伊予弁を聞いた。なんだか私は、それで得をしたような気分になった。

ホテルで、預けていた荷物を受け取り、JR松山駅に行くとき駅前にも二人のマドンナが日傘をさして立っていた。観光記念に写真を撮っていいですか、とたずねると、今朝方と同じように含羞の笑みを見せて快くポーズをとった。

私のような一介の駆け足観光客へのもてなしが街の隅々まで行き届いているような雰囲気は私は十分に感じ取った。配慮と工夫がなされているのだろう。

「『坂の上の雲』のまち松山周遊特別割引券」で観光したのだが、そこに記された施設のすべてを見学することはできなかった。もう一泊すればよかったのだが、残念ながらそれほどの余裕もなかった。

私は高速バスで高松へ向かった。